

宮本先生を思う

安達 誠（東亜天文学会）

私が高校生だった1973年。私の火星眼視観測は、2シーズン目に入っていました。1971年の火星大接近の次のシーズンで、まだまだ視直径の大きな火星の姿を観測する事ができました。

このころ私は、東亜天文学会の会員になり、天界に火星観測を報告するようになっていました。東亜天文学会大阪例会に出席し、アマチュアのトップで活躍されていた佐伯恒夫先生の指導を受けながら、まだ不安定な眼視観測を夢中で続けていました。ある日、佐伯先生から「安達君の家からは花山天文台が見えるんじゃないかい？あそこには宮本正太郎という先生がいられるから、一度たずねてみたらどうかいな。」と声をかけられました。

宮本正太郎先生というと、学校の図書室には先生の著された本がいくつもあり、佐伯先生以上に雲の上の人という程度にしか認識していませんでした。会いに行くなんてことは恐れ多いことだと思っていました。

その当時の私の観測機は、15cm 反射経緯台で、関西光学の望遠鏡でした。この関西光学研究所の所長は宮沢堂（みやざわたかし）という方で、昔、山本一清先生がおられるところに太陽観測の研究者として花山天文台に在籍された方でしたが、この方からも「宮本さんに会いに行ったらいいじゃないか。」とアドバイスを受けました。

住所を適当に書き「花山天文台、宮本正太郎先生」というあて先で、会いたいという手紙を入れて投函しました。その後、学校から帰るとポストの中を覗く日が何日か続いたある日のこと、とうとう先生からの返信を発見しました。先生からの手紙の内容は、電話して時間が合えばいつでももらっしやいというものでした。

先生と初めてお目にかかったのは、手紙をいただいた翌週だったと記憶しています。電話をかけると誰かが取ってくださり、宮本先生につないでくださいました。何をしゃべったのかは、舞い上がっていましたから忘れてしまいましたが、とにかく電話で日時を約束して花山に登ることにしました。

にこにこしながら迎えに出てくださり、初対面となりました。早速台長室に案内していただき、先生にお茶を入れていただき、火星観測の話をしました。1時間くらいいたと思いますが、何をしゃべったのでしょうか。初回は記憶にありません。舞い上がっていましたから、当然ことでしょう。

その日からは、突然、先生から郵便でスケッチを写真に撮ったものを送ってくださったり、論文を送ってくださったりと、先生との交流が続きました。その中には1975年に日本からしか観測できなかった黄雲の貴重なスケッチの写真もありました。このときの先生の観測は、海外の学会に出席されたときに、かばんを置き引きに遭われたことで失われましたが、そのうちのいくつかが私のところに写真として残り、大切な記録がかりうじて残ったという出来事もありました。先生からは火星の雲のことや、砂嵐のことを丁寧に教わりました。スケッチを見せ合い、ああだこうだと思っていたものを話し合うことが多くなりました。退官が近くなると「安達君、京大にきて後を継いでくれんか。」とも言われましたが、「逆立ちしても無理です。」と言ったことを覚えています。

自宅からは花山天文台の本館のドームがよく見えました。写真は宮本先生が観測をされているときのものです。自宅で私が観測する時は、まず火



星を見て、次に花山天文台を見て、気合を入れてがんばったものです。花山天文台のドームが開いていないときに観測するときは、宮本先生の分をカバーしなくちゃと、さらに気合を入れたものです。

それから今日まで、随分観測を続けてきました。昨年から本館の45cm屈折で火星の観測をさせてもらう機会を得ましたが、宮本先生との

出来事を思い出さずにはられません。

本館の図書室に先生の遺影がありますが、はっきり言って怖すぎます。先生は私にはいつも笑みを浮かべたとってもやさしい師匠だったので、